

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00421

研究課題名（和文）15世紀英文学における韻文「聖書パラフレーズ」のジャンルの変容に関する研究

研究課題名（英文）The Transformation of Genre in the 15th-century English Biblical Paraphrase in Verse

研究代表者

松田 隆美（Matsuda, Takami）

慶應義塾大学・文学部（三田）・名誉教授

研究者番号：50190476

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、15世紀に英語で作成された「聖書パラフレーズ」諸作品の分析を通じて、このジャンルが、教化と聖書世界への好奇を組み合わせることで、一般信徒にとっての総括的な教化文学として活用されていることを明らかにした。さらに、これらが主に一般信徒のために編纂された写本に収録されていることを、写本の文脈やパラテキストの分析を通じて示した。アランデル教令(1409年)による俗語神学に対する制限が、逆説的に聖書由来のナラティブの多様化とその盛んな流通をもたらし、独自の宗教文学が停滞したとされた15世紀において、聖書ナラティブはむしろ多様性を発揮して、一般信徒の読者層を開拓していたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アランデル教令が英訳聖書や英語の宗教書の流通を禁じた15世紀のイングランドにおいて、聖書ナラティブが対照的に隆盛し多様化したことで一般信徒にとっての総括的な教化文学として機能したことを、文学史的に辿るとともに、複数の具体例の分析によって例証したことは、中世イギリス文学史への学術的貢献である。また、西洋中世における俗語による聖書受容を、ラテン語原典との比較および写本のコンテキストの分析を方法論として論じたことで、宗教改革前夜における民衆レベルでのキリスト教信仰および宗教教育の実態を明らかにすることに貢献し、中世から近代への転換期におけるキリスト教文化史にとって意義のある成果となった。

研究成果の概要（英文）：Through an analysis of the 'biblical paraphrase' produced in English in the 15th century, this study has shown that this genre, in which the teaching of catechism and curiosity about the biblical world are combined, functioned as a tool for comprehensive religious and didactic teaching for the laity. Furthermore, it was shown through an analysis of manuscript contexts and paratexts that many of the texts were contained in manuscripts compiled primarily for the laity. The restrictions on vernacular theology imposed by the Arundel Constitution (1409) led to the diversity of biblical narratives in the vernacular and their flourishing circulation, revealing that in the 15th century when the production of new religious writings was considered to be limited, biblical narratives demonstrated the diversity and developed a general lay readership.

研究分野：英文学

キーワード：中世英文学 聖書 biblical paraphrase 15世紀

1. 研究開始当初の背景

(1) 15世紀初頭は英語の宗教文学全般にとって重要な転換期である。1409年にカンタベリー大司教 Thomas Arundel が、英訳聖書や英語の宗教書を許可無く所有し読むことを禁じた「アランデル教令」を發布した。その実効性と適応範囲については、中世英文学史の重要課題の一つとして、近年盛んに論じられてきた。注解を廃して本文の正確な散文訳を目指した「ウィフリフ派英訳聖書」が統制の対象となったのは対象的に、ニコラス・ラブの『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』のような情動的で視覚的細部に富んだ福音書の語り直しに、正統な信仰心を育む読み物としてお墨付きが与えられたことはよく知られている。実際、聖書を語り直した作品に関する限り、韻文、散文を問わず15世紀以降も新たな作品が生み出され、また、それ以前の作品についても新たな写本が制作され続けていた。特に、聖書本文を素材としつつも、注解や教訓、外典的な補足を付け加えてかなり自由に編集してひとつのナラティブに仕立てた「聖書パラフレーズ」(biblical paraphrase)は、15世紀にも衰えることなく制作され、複数の写本で流通している。「聖書パラフレーズ」は、聖人伝と聖史劇にならぶ15世紀英文学の主要な営みである。しかし、聖史劇と聖人伝の研究が進展してきたのは対照的に、「聖書パラフレーズ」に特化してその変容を辿った通史的研究は未だ存在しない。15世紀以前に制作された *South English Legendary* や *Cursor Mundi*、あるいは上述の Nicholas Love 作 *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ* などの主要作品以外では、これまでの研究は主要写本の校訂に止まっていて、未だ本格的な作品研究もなされていないのが実情である。中英語の韻文による「聖書パラフレーズ」は、14世紀末から15世紀にかけて、教化や黙想の機能をそれ以前よりも明示的に担うようになっていたと考えられるが、その実態については未だ不明な部分が多く、作品および写本の個別研究を積みかさねて全体像を描きだし、中世イギリス文学史の欠落を埋めて、さらに中世後期の民衆レベルでのキリスト教信仰の実態を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、15世紀に制作された韻文の「聖書パラフレーズ」が、一般信徒の教化と信仰のためのナラティブ的枠組みとして意識的に使用されていることを、同時代の教化文学との相関性および写本毎の機能の違いに注目することで明らかにする。調査の過程においては、同時期にイングランドで流通していた中英語やアングロ・ノルマン語の説教・教化文学との主題や機能における関連性を指摘し、また、教会美術における類例とも比較しつつ、15世紀の「聖書パラフレーズ」は、ナラティブ文学と説教・教化文学のあいだに位置する、総括的な教化のためのジャンルとして機能していることを、具体例を重ねて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) Pecham syllabus の扱われ方の分析 - アランデル教令後には、聖職者が一般信徒に教えるべき知識は、カンタベリー大司教ジョン・ペッカムが1281年に定めたいわゆる Pecham syllabus に限定されたとされる。それがどこまで明示的に実行されているかを、シラバスに基づいた一般信徒の教化のための提要 - *Instructions for Parish Priests* (c.1380-90) や *The Lay Folks' Catechism* (1357) - を参照して明らかにする。さらに、中英語には、暗記しやすいように短い韻文やリストにしたカテキズムの例があるが、それが「聖書パラフレーズ」に組み込まれることで、記憶を助ける(mnemonic)機能を付与された例を分析する。

(2) 写本固有のコンテキストの調査 - 中英語の聖書パラフレーズは、複数の関連した作品を集めたアンソロジー的写本に収録されているケースが多く、そうした写本では、複数の聖書文学 - 聖書パラフレーズ、ディヴォーションナルな黙想詩、典礼用の聖書朗読など - が協同して、ゆるやかな主題上の関連をもつ一つのユニットを作り上げており、聖書パラフレーズは単独ではなく、他の聖書関連作品と相互補完的に読まれたことが推察される。写本のコンテキストに注目することで、作品の機能と受容を写本単位で明らかにする。

(3) 教会美術作品との比較研究 - 中世後期における教会美術の装飾プログラムや15世紀の時禱書における物語絵シリーズが、主要なエピソードを繋げてゆくナラティブ構造を有する点に注目する。こうした視覚芸術の構造との比較により、「聖書パラフレーズ」のepisodicなナラティブ構造を具体的に示し、それが一般信徒の教化に果たす役割を「教化のためのイメージ」の観点から明らかにする。

(4) 主に15世紀に流通していた韻文による聖書パラフレーズおよび関連作品のなかから以下の通り研究対象を選定し、上述の3つの視点に基づいて機能と読者層を分析、調査する。
旧約聖書ナラティブ: *The Middle English Metrical Paraphrase of the Old Testament*; *The Life of Adam and Eve*; *The Storie of Asenath*; *The Epistle of Swete Susan*; *The Metrical Life of Job*

キリスト伝: *Stanzaic Life of Christ; Metrical Life of Christ*; Walter Kennedy, *Passioun of Christ*

新約聖書に関連する聖人伝: Osbern Bokenham, *Legendys of Hooly Wummen*; The Digby *Mary Magdalene; Stanzaic Versions of the Life of Saint Anne*

関連する中英語教化文学、ナラティブ文学: *Instructions for Parish Priests; The Lay Folks' Catechism*; Edmund of Abingdon, *Speculum ecclesie*; *The Book of John Mandeville; Elucidarium; The Chastising of God's Children*

4. 研究成果

(1) 中英語による「聖書ナラティブ」の文学史的考察。

韻文作品を中心に中英語の聖書ナラティブをジャンルに分類して解説することで、15世紀イングランドの宗教政策と関連づけた、初めての文学史的考察をおこなった。

アランデル教令(1409年)以降、一般信徒が神学的テキストを所有し、読むことは制限される一方で、聖職者による信徒の教導および教育への関心は再び高まり、聖書のパラフレーズ作品は、聖書のみならずカテキズムを信徒に教える上で大きな役割を果たすようになる。典礼暦に従って編纂された *Cursor Mundi* や *South English Legendary* のような前世紀の長大な作品は、本来の典礼的機能を果たしつつも、15世紀においては抜粋が制作されて独立したナラティブとしても活用されるようになる。一方で、15世紀半ばの2つの写本に現存する *The Middle English Metrical Paraphrase of the Old Testament* は、その長さによって際立つ壮大な聖書物語の例である。また、*The Storie of Aseneth* をはじめとする聖書外典・偽典にもとづく単独のナラティブ作品は、女性読者のための教訓文学としての受容されたとことが写本の文脈からも読み取れるカルメル会の Richard Maidstone とフランシスコ会の Thomas Brampton がそれぞれに制作した痛悔詩篇のパラフレーズは、個人が信心を実践するための最良のモデルとして機能している。さらに15世紀には、*Stanzaic Life of Christ, Metrical Life of Christ, Walter Kennedy* 作の *The Passioun of Christ* など、韻文によるキリスト伝が新たに制作されている。これらのナラティブ作品は、Pecham syllabus に基づいたカテキズムを、聖書の物語中に注釈や独立したセクションとして組み込むことで、一般信徒の教化のための文学としても機能していた。15世紀イングランドは、全体的には革新よりも拡大の時代だが、聖書ナラティブが示す多様性は、Pecham syllabus にもとづいたカテキズム文学の存在と相俟って、この世紀の宗教文学を特徴づけている。以上のような内容を、具体例とともに論文にまとめ、*The Oxford History of Poetry in English, Volume 3: Medieval Poetry, 1400-1500*, ed. by Julia Boffey and A. S. G. Edwards (Oxford: Oxford University Press, 2023) の1章として刊行した。

(2) 旧約聖書に基づいた中英語の聖書ナラティブの読者と機能。

旧約聖書中の外典・偽典エピソードが単独のナラティブに仕立てられて流通していたケースとして、*The Life of Adam and Eve, The Storie of Asenath, The Epistle of Swete Susan* の3作品を比較しつつ論じた。

楽園追放後のアダムとイヴの生活については、『創世記』にはほとんど記述がないにも関わらず、中世後期イングランドでは、ラテン語の「アダムとイヴの生涯」を素材として複数の中英語ヴァージョンが存在する。これらの諸ヴァージョンは異同が顕著で、たとえば Bodley 596 写本の散文版ではイヴはアダムの配下という扱いだ、Auchinleck 写本の韻文版では、イヴはより対等な位置へと引き上げられて、アダムの指示の元での夫婦の協働、さらに母としての役割にも光があたり、家族にとって模範となるような存在に仕立てられている。もうひとつの特徴として、楽園への地理的関心があげられる。Bodley 596 写本のヴァージョンは楽園が世界の中心であるという位置関係の記述で始まり、Vernon 写本のヴァージョンには楽園はアジアにあるという地理的説明が挿入されている。

The Storie of Aseneth は、『創世記』にヨセフの妻として言及されているに過ぎないアセナトの話で、1450-60年頃に転写された。この作品では亜、婚姻の秘蹟とは現世における永久の結びつきであること、そしてその結びつきは神への奉仕と切り離せないことが強調されている。さらに、ナラティブを通じて思慮分別(prudence)が強調され、アセナトの思慮深さはヨセフの政治的思慮深さに寄与するとともに、二人は政治をヨセフが、家政をアセナトが担当するということ同等的関係で描かれている。敬虔な信仰の元にそれぞれの領域で協力して思慮分別を発揮し、一族を守り富ませる話であり、15世紀の社会的地位のある一般信徒を読者層として意図していたと考えられる。この作品においても、楽園の存在を地理的方向性で示し、中世のオリエンタリズムと形容できるような異教的で地上楽園的な記述が随所に登場する。

The Epistle of Swete Susan はウルガタ聖書の『ダニエル書』13章に基づく。ナラティブの中心は、聖書とは異なり、誹謗されたスザンナのダニエルによる救済ではなく、ヨアキムとスザンナの夫婦としての在り方にあり、婚姻によって結ばれた両者の信頼が強調されている。スザンナの庭園は官能的な空間として描かれており、その記述が地上楽園を彷彿とさせるだけでなく、そのエキゾチックな他者性は作品のオリエンタリズムを高めている。

以上の3作品は、いずれも既婚女性を主人公として、婚姻と改悛の秘蹟の意義を意図的に主題化しており、伴侶とともに試練に立ち向かう過程に焦点を当てている。改悛と婚姻は、7つの秘蹟のうち、一般信徒が日常生活において自分の意志で意識的に実践できる2つである。3作品に

共通して、これら2つの秘蹟の意義を、同時代読者にも応用可能な実践道徳として、具体的なナラティブによって例示するという教訓性が認められる。改悛が、個人として内面から神に向かうというプライベートな側面をもつ一方で、婚姻はキリスト教社会存続のための基本単位であり、両者は対照的といえる。その意味では、3つの例はともに神への信心と一般信徒としての社会的役割を共存させる生き方、つまり *vita mixta* を主題としているといえる。これらのナラティブが意図している読者は既婚女性であり、*vita mixta* がこの2つの秘蹟を軸として営まれることで可能となることを示している。

もうひとつの共通点として、地理的なエキゾチズムに対して意識的な点があげられる。3作品とも、エジプトやバビロンの地理的な隔たりを大切にしつつ、異文化のもつ個性をエキゾチックな他者として意識的に提示している。この特徴は、これらの作品のジャンルの位置づけをあいまいなものとしている。3作品とも、聖書釈義の伝統の延長線上に位置して、秘蹟の意義、あるいは社会的な夫婦の役割を主題化していると解釈できる一方で、エキゾチックな舞台を前面に押し出したロマンス作品として読まれることも可能である。しかし、その解釈の多面性こそがジャンルとしての特徴ととらえられ、こうした単体の聖書ナラティブを他のナラティブジャンルから区別している。成果の一部を「旧約聖書ナラティブの俗語展開 *The Storie of Asmeth* と *The Pistel of Swete Susan* を中心に」として、日本英文学会第96回大会(2024年5月)で発表した。

(3) Edmund of Abingdon 作「聖なる教会の鏡」の諸ヴァージョンにおける教義と読者。

Edmund of Abingdon が13世紀後半に著したとされる「聖なる教会の鏡」(*Speculum ecclesie*) は、ラテン語、アングロ・ノルマン語、中英語で流通したとともポピュラーな作品だが、未だ研究が遅れている。エドモンドは1213-14年頃に、律修聖職者を対象として最初のラテン語ヴァージョン(SR)を著したとされる。その構造は、自己認識から神を知ることへと体系的に上昇してゆくもので、肉体の蔑視を入り口として、被造物、聖書、キリストの人間性を段階的に観想して、最終的にキリストの神性へと至る。この枠組みのなかで、カテキズムの丁寧な説明を中心とした司牧のための神学を展開しており、修道士が観想へと至る過程を主題とするだけでなく、在俗聖職者の教化も意識したハイブリッドな作品である。SRに基づいて13世紀後半にアングロ・ノルマン語ヴァージョン(*Mirour*)が作られ、さらに、読者層を一般信徒へと広げつつ、14世紀末から15世紀にかけては複数の中英語版が作られる。これらの諸ヴァージョンを比較することで、聖書の教えとカテキズムをより分かり易く教えるべく、読者層に対応して本文が変化してきた過程が明らかとなる。

カテキズムの扱い方にはヴァージョン間の相違が顕著である。たとえば、信仰の12箇条と7つの秘蹟は、SRでは単に列挙されているだけだが、*Mirour*以降のヴァージョンでは詳しく解説されている。十戒のセクションでは、「安息日を守ること」に関連して読者層を意識した記述の違いが見られ、具体的に7つの慈善行為を説明するなど、カテキズムへの言及を意識的に増やすことがなされている。SRから後世のヴァージョンへと推移する過程で、最終到達目標である神の神性の観想についての記述は簡略化され、逆にカテキズムをめぐる記述が拡張される傾向が認められる。そこには、読者層の広がりあるいは変化に相俟って、修道士のための観想のための手引きを、一般信徒が現世をより良く生きるための *vita mixta* の精神的な手引きへと作り替えてゆく意図が読み取れる。成果の一部を「Edmund of Abingdon, *Speculum* と俗信徒のための *vita mixta*」として、日本英文学会第94回大会(2022年5月)で発表した。

(4) 新約聖書関連のナラティブおよび聖女伝における読者層と主題。

福音書に登場するマグダラのマリアは中英語において、独立した聖者伝や演劇の形態を含む、多様なジャンルの聖書ナラティブで扱われている。復活したキリストと最初に出会うマグダラのマリアは、「使徒のなかの使徒」として特別視され、修道院文化においては説教者の模範と伝統的にみなされてきた。その一方で、15世紀のイースト・アングリアで制作された中英語の諸ヴァージョンでは、有識の支配者層の教育を視野に入れて、マグダラのマリアの後半生における指導者としての活動に光を当てて、聖女の実践的な美徳を強調している。アウグスティヌス隠修士会士のオズバーン・ボケナムが1440年頃に纏めた『聖女伝』(*Legendys of Hooly Wummen*)は、説教や奉仕に代表されるマグダラのマリアの活動的生活を強調しており、また、Digby 写本のマグダラのマリア劇は、マグダラのマリアの説教において貧者への慈善を重視している。

既婚女性の生き方にひとつの模範を示すのが、聖母マリアの母アンナの生涯である。高齢で子をなしたアンナは出産の守護聖人であるとともに、最初の夫ヨアキムの死後にクレオパ、そしてサロメと、生涯で三度結婚し、3人の子をなしたその生涯は、家政や子育ての面で既婚女性の鏡となった。ボケナムは聖アンナ伝を、サフォークで毛織物業を営んで成功した Clopton 一族の出身の Katherine Denston のために執筆しており、聖アンナは、まさにそのようなイースト・アングリアの地主や裕福な商人層、上級公務員などの婦女子の守護聖人であった。中英語の聖アンナ伝では慈善行為とともに、使用人も含めて自分たちの一族のために蓄えたという優れた管理能力と思慮分別が強調されている。イースト・アングリアの中心都市ノリッジでは、大聖堂の roof boss における聖書エピソードの図像に代表されるように、聖書のナラティブが、パブリックな教会美術として信徒の目に触れる場所に存在している。こうした視覚メディアも、一般信徒の聖書ナラティブに関する基礎知識を補完するべく機能している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Takami Matsuda	4. 巻 20
2. 論文標題 Predestination and Free Will in the Old French and Middle English Versions of the Elucidarium and in the Middle English Chastising of God's Children	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 The Medieval Translator	6. 最初と最後の頁 299-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松田隆美
2. 発表標題 Edmund of Abingdon, Speculumと俗信徒のためのvita mixta
3. 学会等名 日本英文学会第94回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田隆美
2. 発表標題 死と無常の旅 - 西洋中世文学におけるポピュラリティをめぐって
3. 学会等名 慶應義塾大学藝文学会シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田隆美
2. 発表標題 KeMCoにおける書物の風景 - 書物のマテリアリティとミュージアム
3. 学会等名 KeMCo国際シンポジウム「本景 - 書物文化が作りだす連想の風景」（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 299
3. 書名 納富信留、明星聖子編『フェイク・スペクトラム - 文学における 嘘 の諸相』	

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 慶應義塾ミュージアム・コモンズ	5. 総ページ数 251
3. 書名 『本景 - 書物文化がつくりだす連想の風景 / Book-scape: Cultural Landscape of Books and the Web of Associations』	

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 230
3. 書名 赤江雄一・岩波敦子編『中世ヨーロッパの「伝統」 - テクストの生成と運動』	

1. 著者名 Takami Matsuda	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 566
3. 書名 72. 'Chapter 11: Biblical Paraphrase and Poems of Religious Instruction', in The Oxford History of Poetry in English, Volume 3: Medieval Poetry, 1400-1500, ed. by Julia Boffey and A. S. G. Edwards	

1. 著者名 松田隆美	4. 発行年 2024年
2. 出版社 慶應義塾大学言語文化研究所	5. 総ページ数 224
3. 書名 徳永聡子編『神・自然・人間の時間 - 古代・中近世のときを見つめて』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関